Management Club Report

May.2004/Vol.17

Monthly Opinion ≪健康保険制度の変革に備えて≫

■日歯事件、その後にやって来るもの

日本歯科医師会トップを中心とした診療報酬改訂を巡る汚職事件が、マスコミに大々的に取り上げられたことによって、多くの開業医の先生方が患者から「保険診療主体でやりますなんて言ってたけど……」などと白い目で見られたりすることがあると、いささか複雑な思いを抱いているのではないかと思います。

「ヨミウリウイークリー」の５月３０日号には「日歯事件でわかった腐敗構造、自由診療３０年の歯科医が斬る」という特集が組まれ、表紙には「ダメ歯科医の見分け方」などとデカデカと書かれてしまっていました。

ここで登場していた歯科医師は、東京の八重洲で自費専門で開業しているＡ歯科タニグチの院長である谷口清という方で、著作も何点かあるという有名な先生です。同誌の中では次のように紹介されています。

Ａ歯科タニグチでは、初診に最低１時間をかける。今までの治療歴や家族構成まで、突っ込んだ話が進められ、最後にその患者にふさわしい治療法を提示する。冷静に考えてもらうため、自宅に戻って、患者の納得のうえで電話してもらう。何回も通院させるのではなく、徹底した根管治療で治せるものは１回で治す。たとえばリーマーは、納得のいく治療ができない限り、何本でも使い捨て。

そのような治療をするためには、保険医のままでは医院の維持ができないというのが、同氏が保険医を辞めた理由である。保険を使わないので、同院の初診料は１０万円と高額だ。しかし、「他医院で抜歯と診断された歯を、４０年で２万本残した」（同氏）という実績が評価され、他の歯科医で誤った治療をされた患者が、全国から訪れている。

同誌はまた、谷口先生の今回の汚職事件についての考え方を次のように伝えています。

歯科医師会の存在意義は、会員のモラルを維持し、新技術の習得に力を貸し、歯科医への不当な評価に対し、団結力を示すことである。しかし、今回、その団結力は、わいろを贈ってまで、会員の収入を上げることに使われたのです。